

ブリ類養殖振興勉強会

【課題名】第1回ブリ類ゲノムワークショップ参加報告とゲノム育種の方向性

〔講演者所属〕 国立研究開発法人水産研究・教育機構 増養殖研究所
野村 和晴

1 背景・課題

2016年1月7-8日に、米国カリフォルニア州サンディエゴ・ラホーヤにある南西水産研究センターにて開催された第1回ブリ類ゲノムワークショップに参加したので、その概要について報告する。本会議では、近年急速に発展しつつあるブリ類のゲノム研究に関する現状について、各国あるいは各対象種における最新の情勢や今後の展望等に関する情報を共有するとともに、得られたデータのシェアや国際的な共同研究による研究推進の可能性について議論することが趣旨であった。

2 目標

- 第1回ブリ類ゲノムワークショップの概要について情報提供する。
- 14題あった講演のうち主要なものを紹介し、各国の研究開発に関する情勢や今後の展望等に関する情報を共有する。
- 総合討論での議論や、ワークショップ全体を通じた所感を共有し、今後の我が国のブリ類研究や養殖振興に必要な取り組みについて考える機会にする。
- ゲノム情報を活用した育種法の利点と課題を整理する。
- ブリ類研究における産官学の連携を強化・加速する橋頭堡とする。

3 概要

- ワorkshop参加者は、ブリ類ゲノム研究及び養殖に携わっている主要な5カ国である米国、日本、チリ、メキシコ、オーストラリアから、研究者や養殖業者を含めた合計33名であった。
- 日本は他国と対象種が重複しておらず、少なくとも研究面では魚種による住み分けが可能と思われた。
- 米国では、ヒレナガカンパチとカリフォルニアヒラマサを対象とし、ゲノム解読などのプロジェクトが進行中だった。
- チリは、サケマス類でのノウハウを生かして官民一体で南半球ヒラマサの養殖・育種事業に取り組んでいる。
- オーストラリアでは、民間企業と連携して第4世代までの家系選抜による選抜育種を実施している。
- 日本はハダムシ抵抗性の研究などで他国をリードしている。
- 海外では、公的研究機関と民間企業の連携に積極的で、取り組みにスピード感がある。
- ゲノム情報を活用した新たな選抜技術により、育種の効率化や目標達成までの期間短縮が期待されている。
- 我が国でも、産官学の連携を強化し、他国の育種事業戦略に対抗していく術を準備しておく必要がある。
- 育種の実践・検証・普及が今後の課題。